

演題番号：C13

複数の誘発刺激により増悪した尾追行動の犬の一例

○堂山有里，村瀬 茂

バーニー動物病院

1. はじめに：尾追行動とは動物が自分の尾を捕まえようとするかのように円を描いて回転する行動である。機能をもたない反復的な尾追行動により動物の正常な機能を妨げる状態は常同障害とされ一般的にはストレス、欲求不満、葛藤が存在する状況下で生じやすいとされているが、他に種々の病因による非特異的な臨床兆候としても現れることが知られている。今回常同障害を疑って行動診療科を紹介された尾追行動を示す症例に対し身体疾患の治療および行動修正法を実施することで症状が軽減した症例を経験したため身体疾患の行動変化への影響について検討した。

2. 材料および方法：症例は3歳、去勢雄のチワワ。初診時生後8ヶ月齢。5ヶ月齢時に寝ていて突然ギャンと悲鳴をあげた。以降症状顕著となり、うなりながら腹部の毛を噛んだり尾を追いかけたりする行動を繰り返すようになった。血液化学検査およびレントゲン検査は正常、MRI検査においても中枢神経系に異常所見はなく行動診療を紹介された。

3. 結果：初診時症例は様々な誘発刺激に反応し1日に10回以上の尾追行動を発現していた。目の周りや耳を痒がる仕草が顕著であったためアレルギー検査を実施し結果に従い

食事療法およびオクラシチニブの内服を開始するとともに行動修正法を実施したところ尾追行動の頻度は半減した。しかし人がいない所や寝ている時に飛び起き腹部の皮膚を引っ張る行動が引き続き見られたため腹部の違和感があると推定しプレガバリンを処方したところ、尾追行動が顕著に減少した。現在食事療法およびオクラシチニブを継続しプレガバリンは減量中である。

4. 考察および結語：本症例では尾追行動の誘発刺激として皮膚の痒みや末梢神経が関わる痛みあるいは違和感が関与した可能性が考えられた。また腹部の違和感に対し口を持っていく行動で飼い主の関心が得られたことも症例の尾追行動を増悪させる一因となったと思われる。抗痙攣薬であるプレガバリンは電位依存型カルシウムチャンネルに結合し興奮性神経伝達を減弱させることで神経性疼痛を緩和する作用があり腹部の違和感に何らかの効果を示した結果尾追行動を減弱させたのかもしれない。行動の問題が身体疾患と関連が深いことを再認識する結果となり、今後かかりつけ医と行動診療科、神経科などの専門医との連携が重要となることが示唆された。